

- ◎ 解答は解答用紙に書くこと。(氏名は書かないこと)  
 字数制限のあるものは、句読点などの記号も字数に含む。

一 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

受 験 番 号

今、目の前に同時的に存在しているさまざまな現象を整理するのが分類的なわかり方です。

目の前に立ち現われる現象のわかり方にはもうひとつの軸があります。時間的<sup>①</sup>つながりの理解です。筋道を立てる、というわかり方です。

( A )、江戸時代の笑い話に「風が吹くと桶屋が儲かる<sup>②</sup>」というものがあります。

なぜ風が吹くと桶屋が儲かるのでしょうか？ 風が吹くと、どこからか小判でもひらひらと飛んできて桶の中に収まる、とでも言うのでしょうか。そうではありません。ちゃんと理屈があるのです。

風が吹くと、砂ぼこりが立ちます。

砂ぼこりが立つとその砂が目飛び込みます。

砂が目に入ると目が見えなくなります。

一時的に目をやられるだけでなく、永久に目をやられてしまいます。

目が見えなくなると、ほかに生計が立てられなくなるので、三味線<sup>しゃみせん</sup>を弾いて街を流すことになります。

三味線弾きが増えると、当然三味線の需要が増えます。

三味線の需要が増えると、三味線に使う猫の皮の需要も増えます。

猫の皮の需要が増えるということは、猫取りが増えて、町にいる猫の数が減ります。

町から猫が減ると、猫の好物になっていた鼠が増えます。

鼠が増えると、桶がガリガリとかじられる機会が増えます。

桶がかじられると、新しい桶を作らなければなりません。桶屋へ桶の注文が殺到します。

桶屋は有卦<sup>うけ</sup>に入り、笑いが止まらなくなります。

もうおわかりでしょうか。風が吹くと、桶屋が儲かるのです。これはもちろん冗談で、おたがい無関係な現象をもつともろく関係づける滑稽<sup>こっけい</sup>さを笑ったものですが、無関係とはいえ、理屈の上ではちゃんとまとめに【 一 】関係が作り上げられています。

このように、それだけではわからない現象が、その由来にまで遡<sup>さかのぼ</sup>って説明されると、あなるほどわかったと感じられます。

なぜわれわれは今ここにこうして存在しているのでしょうか？

チャールズ・ダーウィンはこのことに疑問を持ちました。つまり、この理由をわかりたいと思いました。( B )、生物はあらゆる可能な形態を取り得

ること、そしてその中でもっともその環境に適応した形態が生き延びるのだという仮説を立てました。さまざまな形態が生み出されるけれども、置かれた自然

にもっとも都合のよい形態が生き延びて、今の動物世界を作り上げたのだ、と考えたわけです。

この考え方を人類に適応してみましよう。

四本足の動物の中で、偶然に二本足で立ち始めた動物が現われます。二本足だと闘争や追跡の効率が悪いのですが、手が「移動」という仕事から解放され、

道具を使うことが出来るようになります。また直立した分だけ、視線が高くなり、危険の察知も早くなります。

多分、現在人間にもっとも近い動物であるサルと人間の共通の祖先から、二足歩行動物が現われたと思われます。この二足歩行動物はあちこちで発生し、さ

まざまな適応を試みたのでしよう。何百万年の時間の流れの中で、そのうち、言葉<sup>ことば</sup>を話す種類が出現します。言葉を使うと、複雑な情報を交換出来ますから、

集団移動、集団攻撃、集団防衛などが出来、さらに生存能力を高めることが出来ます。

このようにさまざまな可能性の中から、現存の人類が誕生し、地球にはびこることになったのだと思われます。

これは自然淘汰による適者生存の原理と呼ばれ、この原理<sup>④</sup>によって生命は進化してきた、と考えるのです。これがダーウィンのわかり方で、進化論と呼ばれ

ます。

ではなぜ、そもそもさまざまな形態が出現するのでしょうか。なぜ始めに二足歩行をする動物などという都合のよい動物が出現し得たのでしょうか。

現在の考え方によると、生命は遺伝子によってその種を持続します。つまり遺伝子が複製されることで、同じ種が持続します。しかし、遺伝子は結晶のよう

に安定しているわけではありません。一代ごとに分裂、結合を繰り返しています。この過程が意外に不安定で、しょっちゅう間違いを起こしています。この

ため、少しずつ違った形態を生み出すのです。

つまり、遺伝子による種の保存、この遺伝子の複製間違いによる形態変化、その中で環境にうまく適合したものの保存、ということの長い長い繰り返しという事です。<sup>⑤</sup>

これが現代の進化論です。  
つまり偶然と試行錯誤が今のわれわれを作り上げた原動力というわけです。

生物学者のほとんどは人類誕生の理由をこの筋道で考えています。わかりやすいし、どこにも無理がないからです。でも考えの流れは風桶論と同じパターンですよ。

風桶論との違いは、風桶は言葉の遊びで、進化論はダーウィン以来、多くの生物学者が検証を続けている、科学的な問題だということです。言葉遊びと、生物学最大の思想との間に存在する価値的な差は巨大ですが、心の働きとしては同じわかり方です。説明がうまくつながれば、「わかった」と感じられるのです。

もうひとつ例を挙げます。

どうしてわれわれが今、ここにいるのか、についての別の説明です。<sup>⑦</sup>

どこの民族も創世神話を持っています。

もつとも有名なイスラエルの創世神話ですと、神様が最初にアダムを自分のからだに似せて作り、ついでアダムのあばら骨からイブを作ったことになっています。その後はアダムとイブの男女の交わりから子供が出来ます。(中略)

つまりイスラエルでは人間は神様ではありません。神様に作られたものです。一方、日本の場合は直接神様が下界である我が国に降りてきて直接支配を始めたわけです。じゃあ、普通の人はどこからきたのかというと、その点はあまり説明の努力をしません。下界にも、もともと別の神様がいつはいいたみたいです。

いずれの場合も、神様というんでもない超能力の、それも人間に似た形をした存在が実在していて、その超能力者がわれわれの先祖を作り、あるいは支配した事になっています。

神様はわれわれの来し方を説明するひとつの方法として発明されたのです。

なぜ、僕はここにいるの？

という根源的な疑問を発する哲学的な子供に対して、お父さんが「神様がおまえをくださったのだよ」と説明しているのです。

そうかあ、神様のおかげか、ふんそうか、と子供はわかるのです。

でも、そのうち、神様って何？ と聞くかもしれません。

お父さんは困って、なんでも神様が作られるのだよとか、なんでも神様がくださるのだよ、とか言って、その場を切り抜けるでしょう。

子供は、そうか、神様って偉いんだ、と神様のことがなんとなくわかるのです。

ダーウィンはなぜ人が今ここにいるのかを説明(話をつなげる)しようとして進化論という仮説を打ち立てたわけです。

人類の多くはダーウィンのようににはわかるうとせず、神様という自分たちより圧倒的に賢い存在があるはずだと信じて、わからない部分の穴埋めに使っているわけです。( C )、神様という仮説を立ててきたわけです。

進化論も神様論もなぜわれわれがいまここにいるかを説明しています。われわれは説明出来ればわかったと感じるのです。話が【 I 】的につながればわかったと思うのです。( 山鳥重『わかる』とはどういうことか『より) ]

\* 語注 ・有卦に入る…幸運に巡り合つてよいことが続く。

問一、( A ) ( C ) に当てはまる語を、次のア～オの中からそれぞれ一つ選び記号で答えなさい。

ア もし イ たとえば ウ いわば エ そして オ しかしながら

問二、傍線部①「時間的つながりの理解」とはどのように理解することか、次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

ア 現象が起きた原因を時間的に整理し、由来にまで遡って理解すること。 イ 現象が起きた歴史を調べ、その時代背景を理解すること。

ウ 現象が起きた原因を時間的に整理し、その現象の発生時期を理解すること。 エ 現象が起きた歴史を調べ、その正誤を見極めて理解すること。

問三、傍線部②「風が吹くと桶屋が儲かる」とあるが、この言葉の意味として正しいものを、次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

ア 商売をするには多少の犠牲を払う必要がある、ということ。 イ 小さな出来事が、いつの間にか大きな問題になっている、ということ。

ウ 商売が成功するきっかけは日常生活に潜んでいる、ということ。 エ あることが巡り巡って思いがけないところに影響が出る、ということ。

問四、傍線部③「需要」の対義語を、漢字で答えなさい。

問五、【 I 】 【 II 】 に当てはまる熟語を、次のア～オの中からそれぞれ一つ選び記号で答えなさい。

ア 空間 イ 因果 ウ 前後 エ 上下 オ 時間

問六、傍線部④「この原理」とは何を指すか、本文中から抜き出しなさい。

問七、傍線部⑤「遺伝子による種の保存、この遺伝子の複製間違いによる形態変化、その中で環境にうまく適合したものの保存、ということの長い長い繰り返し」を別の表現で述べた部分を本文中から抜き出しなさい。

問八、傍線部⑥「同じパターン」とあるが、どのようなわかり方のことか、本文中から十四字で抜き出しなさい。

問九、傍線部⑦「別の説明」とは何か、次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

- ア 神様論    イ 進化論    ウ 風桶論    エ 創世神話

問十、傍線部⑧「神様はわれわれの来し方を説明するひとつの方法として発明された」とあるが、なぜこのような発明がなされたのか。それを説明した次の文の空欄に当てはまる語句を本文中から抜き出しなさい。

ダーウィンのように原理を説明しようとせず、神様を（    X    ）だと信じ、（    Y    ）に利用するため。

問十一、本文の内容に合致するものを、次のア～エの中から一つ選び記号で答えよ。

- ア 生物にさまざまな形態が生み出されたのは、環境に適応するという必然の結果である。  
 イ チャールズ・ダーウィンの提唱する進化論によれば、人類の祖先はサルだと言える。  
 ウ 進化論と風桶論には大きな違いはなく、心の動きという点ではまったく同じである。  
 エ 私たちは「神様」のような存在を「わかった」と感じるために用いることがある。

## 二 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

小学校の校庭に三十二人の子供がいた。入学して間もない一年二組の子供たちだ。春の明るい陽射しが降り注ぐ中、屋外活動用のボードを首から提げ、担任の渡辺孝代先生の話聞いている。上下とも白っぽいジャージを着た渡辺先生は、サンバイザーの下から子供たちの顔を見まわした。

「春のしるしを見つけよう」

いささか抽象的な提案だったにもかかわらず、はい、と子供たちは返事をした。（中略）春のしるしを探していくのは、有意義な時間になるはずだった。はず、ではなくて、実際に有意義な時間だった。子供たちはさまざまな春のしるしを見つけて教室へ戻った。

ただ、戻ってみたら、ひとり足りなかった。（中略）

「これからみんなで探していきます。今度は必ず手をつないで、二列になって」

一年二組はもう一度二列に並んで校舎を出た。（中略）

さて。足りなかった子はいくつか見つかった。みんなで春のしるしを探していたあたりからそう離れていない場所に、小さな背中が見えた。先生はほっとした。横山寧々もほっとした。その他のたくさんの子供たちは、特に何の感<sup>a</sup>も抱か<sup>いだ</sup>なかった。ただうらかな春の光を浴びてにぎやかに<sup>にぎやかに</sup>歩いていた。

どうして蟻の行列がこんなにもしろいのか柏木温之にはわからなかった。おもしろいと自分が思っていることさえもよくはわかっていなかった。ただじつと眺めている。蟻が何匹も何匹もいてどんどんどんどん歩いていく。その様子を眺めていると、風に吹かれて舞い上がってしまいそうな胸の中の何かが、きちんと元の場所へ収まるような感じがした。このままずっと眺めていたかった。

柏木さん、と強い声が出た。彼はただ、強い声だと感じただけだ。（中略）

彼は業を煮やした渡辺先生に腕を取られ、無理やり横山寧々と手をつながされ、校舎の中へと引きずられるように連れていかれたのだった。

ひとつの教室に揃った新しい一年生たちの顔が、陽の光を水面に反射させた小川のように晴れがましくちかちかと輝いている中で、ハルの瞳はすぐに玉が落ちてしまった線香花火のようだった。チチチと心許なく細い火花のしっぽを散らすだけの、生気のない、存在感のない、小さい子供だった。

ハルは何もしなかった。できなかった。やろうとしなかった。どのように思われても本人はかまわなかった。なにしろ彼の心はそこになかった。そこにも、ここにも、どこにもなかった。ハルの心は常にそのへんを漂っていて、たまにカチツとピントが合ったときにだけ身体に返ってくる。そういうときのハルの目には光が宿り、いきいきと動き出す。しかしピントがいつ合うのか、どこに合うのか、本人にもぜんぜんわかっていなかった。

ハルは授業を聞かなかった。聞かなかったからといって、これといってすることもないので、連絡ノートや国語のノートに心に浮かぶものを描きとめていった。蟻。蟻だ。描き出すと止まらなかった。蟻。次のページにも、また蟻。蟻の行列。実際にハルの目にウツった蟻と、記憶にある蟻は相似しているのに、ノートに出現した蟻はずいぶん違った。違うということが自分でもわかって、ハルはもどかしかった。蟻のすばやい身のこなし、身体の軽さ、歩く速度、何事にも動じず前へ前へと進んでいく脚力。そういう美しいものをもっと正確に描きたかった。

そうだ、見て描けばいいんだ。ハルは立ち上がった。椅子がカランと鳴った。担任の先生は授業中に立ったハルを見て、眉をひそめた。<sup>④</sup>

「トイレなら急いで行ってらっしゃい」

声をかけたが、ハルは返事をしなかった。先生のほうを見てもいない。ただノートと鉛筆を持って、教室を出ていくところだった。

「柏木さん」

男子にも女子にも苗字にさん付けして呼ぶことに決めている先生がハルを呼んだ。ハルはふりむかなかった。(中略)

蟻だ、と思った。あいつ、蟻の行列を見てたんだ。

柏木温之がしやがみ込んでいた場所をひと目見て、浅野健太は瞬時に理解した。そして思い出した。昔、保育園時代、年少組の頃だったか。園庭で蟻の行列を見ていたら、美幸先生に笑われた。健太君、カワイイね、蟻なんかそんなにおもしろい？おもしろくねえよ、と健太はソク座に答えた。動揺していた。蟻を見ていると、笑われるのか。それなら隠さなくてはならない。蟻はおもしろかった。何時間でも見ていたかった。でも笑われるのはごめん。不思議なことに、蟻に興味などないように見せかけていたら、だんだんほんとうに興味がなくなってしまった。何時間でも見ていられた蟻は、一分も見ていられればじゅうぶんだと思えるようになった。俺も大人になったな、と健太は思った。さばさばした気分だったが、少しだけさびしかった。

あゝ<sup>⑤</sup>のときの気持ち<sup>⑤</sup>を、今はつきりと思いつている。あいつは今でも蟻を見てられるのか。誰にも笑われなかったのか。いや、そんなことはないだろう。笑われても、動じなかった。それは、ものすごく強いってことなんじゃないか。

足を棒きれのように突っ張らせていた柏木温之が、やがてどうでもよくなったみたいに力を抜いて校舎へと連れ戻されるのを、浅野健太は呆然と見た。ハル、と訴えていた。先生はあつさり無視したけれど、名札を差していたから、きつと自分の名前はハルだといいたかったんだろう。

塚谷亜佐美と手をつないで二列に並んで歩きながら、こんなことをしている場合じゃない、と思った。クラスにこんな強いやつがいたなんて。それまでの健太は、保育園では走ればいつも一等だったし、背も高いほうから二番目だったし、女子にもモテた。小学校に上がった後も優勝だと思っていたのだ。

柏木温之。こいつは何者だ。

走るのが速いとか、身体が大きいとか、女子に人気があるとか、そんなことがぜんぶどうでもいいことのように思えた。なんだかわからないけどあいつはすごい。子供心にも怖れを抱いた。だいたい、先生のいうことは聞くものだと思いつい込みが、いかに<sup>d</sup>コ定観念に縛られた、管理側にとって都合のいいものだったかということも、もちろんそんな語彙はなかったけれども、健太は直観で悟った。

蟻か。すげえ。<sup>⑥</sup>柏木温之、すげえや。

それなのに先生はそれを理解しようとしなかったばかりか、彼を叱った。理不尽である。わからずやである。これからの俺は、先生ではなく柏木温之のいうことを信じよう。柏木温之を大事にしよう。健太はそう決めた。<sup>⑦</sup>自分がまた大人に近づいたような気がした。とりあえず塚谷亜佐美の手をそっと離し、先生に引きずられていく柏木温之の細っこい背中をまぶしく見た。

次の瞬間、ふと、<sup>⑧</sup>異様な気配を感じた。顔を上げて、健太は自分の目を疑った。校舎の上方で異変が起きていた。上空がピンクに染まっている。なんだろう、この空、この色。信じられないようなピンク。何かすごいことが起こる、と健太は確信した。胸がどくどく鳴った。ふたたびつなごうと伸ばしてきた塚谷亜佐美の手をふりほどき、友達の背中をかき分けて、柏木温之に追いついた。

「ハル、空」

後ろから声をかけると、先生に右手、横山寧々に左手をつながれて歩いてきたハルは、足を止め、そのまますぐに顔を空へ向けた。三秒か、四秒。ちょうど同じ時間だけ健太も空を見上げていた。これから何かすごいことが起こる、と健太は確信した。健太が顔を戻したのと同時にハルが健太をふりむいて、にこっと笑った。ああ。健太にはわかった。これがしるしだ。【 ー ー 】を、俺はちゃんと見つけた。

(宮下 奈都『ふたつのしるし』より)

問一、傍線部 a～d のカタカナと同じ漢字を使う熟語を、それぞれア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

a 「感 <sup>レ</sup> ガイ」	「ア フンガイ	イ ガイネン	ウ ガイコク	エ ヒガイ	「
b 「ウツ <sup>ッ</sup> た」	「ア アイテン	イ シヤシン	ウ セント	エ エイガ	「
c 「ソク <sup>座</sup>	「ア キユウソク	イ ソクセキ	ウ ソクリョウ	エ ドソク	「
d 「コ <sup>定</sup>	「ア コツキ	イ コベツ	ウ ギョウコ	エ コドク	「

問二、傍線部「」の中の「に」のうち、文法的に異なるものを一つ選び記号で答えなさい。

問三、傍線部①「抽象的」とあるが、抽象的な表現が使われている文を、次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

ア 今度の休暇には、どこかゆつくりできるところに行きたい。 イ 最近暑くなってきたので、熱中症に気をつけよう。

ウ 今度のテストでは、前回より十点以上は成績を上げたいと思う。 エ 最近勉強ばかりしているので、ゲームをする時間が欲しい。

問四、傍線部②「ハルの瞳はすぐに玉が落ちてしまった線香花火のようだった」に使われている表現技法を、次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

ア 倒置法 イ 擬人法 ウ 隠喩法 エ 直喩法

問五、傍線部③「ハルの心は常にそのへんを漂っていて、たまにカチッとピントが合ったときにだけ身体に返ってくる」とはどういうことか、当てはまるものを、次のア～エの中から一つ選記号で答えなさい。

ア いつも決断することができずぐずぐず迷ってばかりいるが、たまに思い切った行動に出るということ。  
 イ ふだんは注意力散漫だが、いざという時には前向きな行動をとることができるということ。

ウ 関心のないことには見向きもしないが、関心のあることに出会った時だけ集中するということ。

エ ふだんからボーっとしているが、叱られると素直に反省し改善することができるということ。

問六、傍線部④「眉をひそめた」とあるが、この時の渡辺先生の気持ちとして当てはまるものを、次のア～エの中から一つ選記号で答えなさい。

ア 呆然 イ 不快 ウ 感動 エ 焦燥

問七、傍線部⑤「あのとときの気持ち」として当てはまるものを、次のア～エの中から一つ選記号で答えなさい。

ア 自分が少しだけ大人になったと感じ誇らしく思う気持ち。 イ 先生に笑われてひどく傷つき悲しく思う気持ち。

ウ 自分にとって大切な何かを失ったようで残念な気持ち。 エ 周りから変な目で見られて不安に思う気持ち。

問八、傍線部⑥「柏木温之、すげえや。」とあるが、健太がこのように思ったのはなぜか。その理由を簡潔に答えなさい。

問九、傍線部⑦「自分がまた大人に近づいたような気がした」とあるが、その理由を次のア～エの中から一つ選記号で答えなさい。

ア いつのまにか蟻を一分も見えていればじゅうぶんだと思えるようになったから。 イ 走るのが速く、身体が大きく、女子に人気があるから。

ウ 「先生のいうことは聞くものだ」というのは思い込みであると気づいたから。 エ 「先生」というのは理不尽なものだと気づいたから。

問十、傍線部⑧「異様」の熟語の構成を、A群のア～カの中から一つ選記号で答えなさい。また、同じ構成の熟語を、B群のア～カの中から一つ選記号で答えなさい。

A群 ア 同じような意味の漢字を重ねたもの イ 反対または対応の意味を表す漢字を重ねたもの

ウ 上の字が下の字を修飾しているもの エ 下の字が上の字の目的語・補語になっているもの

オ 主語と述語の関係にあるもの カ 上の字が下の字の意味を打ち消しているもの

B群 ア 寒冷 イ 進退 ウ 登山 エ 市営 オ 無常 カ 海底

問十一、【一】に当てはまる言葉を、本文中の語を用いて六字で答えなさい。

### 三 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

問一、次の各文の傍線部を、主語にふさわしい敬語に直すとき正しいものを、それぞれア～ウの中から一つ選記号で答えなさい。

① 校長先生が給食を食べる。

【ア いただきます

イ お食べなさる

ウ 召し上がる

【

② 校長先生が音楽を聴く。

【ア お聴きになる

イ 拝聴する

ウ 聴き申し上げる

【

③ 校長先生が家に来る。

【ア いらっしゃる

イ 参られる

ウ 伺う

【

問二、【一】内の意味になるように、空欄に入る言葉を、ア～オの中からそれぞれ一つ選記号で答えなさい。

① ( ) がさがる

【敬服する】

② ( ) が売れる

【有名になる】

③ ( ) にかける

【自慢する】

ア 腹 イ 鼻 ウ 頭 エ 顔 オ 目

問三、A、B、Cの三人がいます。一人はいつも真実を言う。別の一人はいつもウソをつく。他の一人は真実とうそを交互に言う。この条件で三人とは別のDが目隠しをして、「赤のカード」と「青のカード」が何枚も入った箱を持っています。Dが箱の中から一枚カードを取り出し、ほかの三人に何色かたずねたらAは「青」、Bは「青」、Cは「赤」とそれぞれ答えました。次にDが別のカードを取り出し、同じ質問をしたら、今度は、Aは「赤」、Bは「青」、Cは「青」と答えました。さて、Dが取り出したカードの色は何色と何色だったか、次のア～ウの中から一つ選記号で答えなさい。

ア 青と赤 イ 青と青 ウ 赤と赤

問四、次のア～エの文を並び替えたとき、最後に来る文を一つ選記号で答えなさい。

ア しかし、途中から雲行きが怪しくなり、雨が降り始めた。

イ 今日はよく晴れた気持ちの良い朝だったので、気分がよかった。

ウ しかも、今日に限って傘を持ってきていないことに気がついた。

エ よって、せっかくの良い気分が台無しになってしまった。